

毒瓦斯発明官

——金博士シリーズ・5——

海野十三

青空文庫

蒸し暑い或る夜のこと、発明王金博士は、袖のながい白服に、大きなヘルメットをかぶつて、飾窓をのぞきこんでいた。

南京路の雑沓は、今が真盛りであった。

金博士の視線は、さつきから、飾窓の小棚にのせられてある洋酒の群像に釘づけになっている。いや、正しくいえば、その洋酒の壇にぶら下げられた値段札の数字に釘づけになっているという方がいいだろう。

「あはは……」

博士がとつぜん声をあげた。これは決して博士が笑ったのではない。実は大歎息をしたのである、あははと……。およそ歎息というものは、感極まってその窮極に達すればあたかも笑声のような音を発するものである。嘘だと思つたら、読者は御自分で験してみられるがよろしかろう。

「あはは、あの味のわるいウイスキーが一壇五百元とは、べら棒な値段じゃ。その昔、重慶相場というのがあったがその上をいく暴働じゃ。同じ五百元でも、こっちのペパミントがいい。こいつを、氷の中に叩きこんで、きゅつきゅつとやると、この殺人的暑さは嵐にあつた毒瓦斯の如く逃げてしまうことじやろうが、それにしても五百元とは高い、今のわしの財政ではなあ」

金博士は、このごろアルコールに不自由をしている上に、金にも困っていると見え、さてこそ極限歎息の次第と相成つたらしい。

丁度そのときであった。金博士の頭を目がけて、一匹の近海蟹のようによく肥えた大蜘蛛が、長い糸をひいてすると下りてきた。そして、もうすこしで、金博士のヘルメットにぶつかりそうになつて、ようよう下るのを停めた。おそるべき大蜘蛛だ。こんなやつに頸のあたりを喰いつかれ、生血をちゅつちゅつ吸われたら、いかな頑固爺の金博士であろうと、ひとたまりもなかりうと思われた。

「もしもし金博士、おなつかしゅうございますなあ」

とつぜん、その大蜘蛛が金博士に言葉をかけたのだつた。冗談じゃない……。

「うん」

博士の鼓膜こまくに、その声が入ったのか、博士は生返事なまへんじをした。生返事なまへんじをしただけで、彼はなおも飾窓の青いペパミントの値段札に全身の注意力を集めている。

「博士せんせいは、いつに変わらず御壮健ごそうけんで、おめでとうございます。この前、金博士にお別れをしてから、もうかれこれ五六年になりますなあ」

その化け物のような大蜘蛛は、しきりに金博士をなつかしむのだった。これを横から眺めていると、博士も亦また、蜘蛛の化け物じやないかという疑いが湧わいてくる。そういえば「新青年しんせいねん」誌上にのっている金博士の顔は、蜘蛛の精じみた風貌ふうぼうをもっているよ。

閑話休題さして、金博士は、ようやく注意力の二割がたを、蜘蛛の声に向けて割さいた。

「おう、そういうお前は 醬買石しょうかいせきじやな。お前はまだ生きていたんか」

醬買石しょうかいせきといえ、あの有名なる抗日遷都將軍こういちせんとうの名である。すると醬買石も、ついに人間の皮を被かぶつては遷都する先がなくなつて、遂に大蜘蛛に化けたのであるか。それとも、彼はオーストラリヤで戦車にのし鳥賊いしかられて絶命し、魂こんぱく魄ぱくなおもこの地球とどまに停とどまつて大蜘蛛と化したのであるか。

「あれ、金博士せんせい。醬はそう簡単に死にませんよ。しかしとにかく、博士にお目にかかりたいばかりに、部下もつれずに单身、きびしい監視網かんしもうをくぐつて、ようやくここまで参

りました。そしてとうとう博士に行き会いまして、こんな嬉しいことはございません。ふふふふ」

ふふふふは、醬の笑い声ではない。感激の泣き声である。泣き声がその極致に達すれば笑い声に似たる——ああもうその解説はよろしいか。なるほど前にも鳥渡書きましたなあ。

「泣くなよ、醬。お前は小便僧時代から泣きべそじやったな。東に楠の泣き男あり、西に醬買石ありで、ともに泣きの一手で名をあげたものじゃ。で、わしに会いに来たというのでは、また何か大それた無心じやろう」

金博士は、やつぱり前躑みになつて、飾窓の中をのぞきこみながら口を動かした。博士は、まさか頭の上に忍びよつたる大蜘蛛と話をしていのだとは気がついていない様子に見えた。

「やあ、そのとおり、それが凶星でございますよ。余——いや小生はこのたびぜひとも博士にお願いをして、毒瓦斯をマスターいたしたいと決心しまして、そのことで遙々南海の孤島からやつて参りました」

「毒瓦斯の研究か。そんなむずかしい金のかかるものは、お前の柄じゃないぞ」

「いえ博士、そう仰有らないで、是非にお願いいたします。今こそ孤島に小さくなつていますが、昔日の太陽を呼び戻すには、猛毒瓦斯を発明し、その力によつてやるのではないと全く見込みなしとの結論に達し、博士にお頼りに参りました。ぜひともこの醬を哀れと思召し……その代り、お礼の方はうんときばり、博士のお好みのものであれば、ウィスキーであろうとペパミントであろうと……」

「そうか。それは本当じやな。男の言葉に二言はないな——というて相手がお前じや仕様ががないが……」

といいながら、博士は飾窓から顔を放して腰を真直にのぼしたものだから、さつきから垂れ下つていた大蜘蛛が一揺れ揺れると、博士の顔へぴしゃと当たつた。さあたいへん、危いかな博士の一命！ 生かまたは死か？

……筆勢あまつて嚇し文句を連ねてはみたが、ここで金博士が、間髪を容れず、顔にあたった大蜘蛛を払いのけ、きやあとかすうとかいつてくれれば、作者も張合があるのであるが、当の博士は、別に愕きもなにもしない。甚だ張合のない次第であった。愕くどころか、博士は、矢庭に手をのばして、その大蜘蛛の胴中をつかんだものである。

すると、ガラガラと、ラジオの雑音のようなものが聞えた。

金博士は、つかまえた大蜘蛛を口のところへ持つて行き、声を一段と低くして、

「おい醬買石、今すぐわしは、お前の居る屋上へ上つていくから、すこし待つて居てくれ。しかしお前も、こんどというこんどは余程懲りたと見え、屋上から、蜘蛛に見まがうような擬装のマイクと高声器をつり下げて、わしに話しかけるなんて、中々機械化してきたじやないか、はははは」

「いや、ちとばかりソノ……」

「しかし、この無細工な蜘蛛を屋上からこの人通りの多い通りに吊り下ろすなんて、やっぱりお前は、垢ぬけのしないこと夥しい。この次からは、もつといい智慧を働かすがいい」
褒められたと思つた醬は、とたんにぺちゃんこにやつつけられた。

さて、ここは屋上である。例の洋酒店のあるビルの屋上であつた。

のっそりと、非常梯子ひじょうばしこからあがつてきたのが金博士であつた。非常梯子の上り口に立

つて、うやうやしく挙手きよしゆの礼をして立つている二人の白いターバンに黒眼鏡に太い髭ひげの

印度人巡警インドじんじゆんけい！ 脊せきの高い瘡やせた方が醬買石しやうかいせきで、脊が低く、ずんぐり肥っている方

が、醬が特選して連れてきた前途有望な瓦斯師長ガスしちやうくんせい燻精くわんせいであつた。二人は、まるで舷門げんもん

から上つて来た司令官を迎えるように、極めて嚴げんたる礼をもつて金博士に敬意を表ひやうした。

博士は、几帳面きちやうめんに礼をかえすどころか、いきなり醬の瘡やせた肩をどんと叩いて、

「おい、ウイスキーにペパミントの約束、あれはまちがいないじやろうな。一本が五百元もするぜ。お前そんなに金を持つとるか」

と、無遠慮ぶえんりよな問いを發した。

「や、それはもう大丈夫です。御承知のとおり、昔からイギリスと深い関係がありますものですから、武力こそ瘡やせ細つていますが、黄金であろうとダイヤモンドであろうとウイスキーであろうと、そんなものは、うんとストックがあります」

「ほ、ん、と、ですか」

「もちろん本当です。国破くにやぶれて洋酒ありです。尤もつとも早いところストックにして置いたので

すがね……しかし博士、毒瓦斯の方のことですが……」

「うん、毒瓦斯なんて、他愛もないものじゃ。ウイスキーになると、そうはいかん」

「いや博士、ウイスキーなんて浴びるほどあります。毒瓦斯の研究となると、そうはいかん」

「よろしい、バター・システムで取引しよう。一体どんな毒瓦斯が入用か。フォスゲン、ピクリンサン、ジフェニルクロルアルシン、イペリット、カーボンモノキサイド、どれが欲しいかね」

下は人工灯の海、上は星月夜、そして屋上は真暗だった。その真暗な屋上に立つて、金博士は大きく両手をひろげる。

「そんなものは、どれも欲しくありません」

醬は人一倍大きな頭を左右に振る。

「ほう、これじゃ気に入らんのか」

「博士。余——いや私の欲しいものは、そんな従来から知れている毒瓦斯ではありません。そんな毒瓦斯は、吸着剤の活性炭と中和剤の曹達石灰とを通せば遮られるし、ゴム衣ゴム手袋ゴム靴で結構避けられます。そういう防毒手段のわかってい

る毒瓦斯は、今じやどこへ持つていつて撒まいても、効目ききめがありません。もつとよく効く、目新らしいものがないですなあ」

ナンキンむしたいじ
南京虫退治しんざいの新剤しんざいを探しているようなことをいう。

博士は、別段困つた顔もせずうなずに肯うなずき、

「わしのところには、どんなものでもあるよ。今お前のいつた防毒面をどんどん通して、今までの防毒面じや役に立たない毒瓦斯があるがこれはどうじや」

「それはいいですなあ。しかしそれは〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇じやないのですか」

「ほう、それを知っているか。この種しゅのものはドイツと〇〇だけが持つているので、従来じゆらいの防毒面ではまるで防ぐ力がない」

「しかし博士せんせい、それも駄目ですよ。なぜといつて、他の国には無いかもしれないが、ドイツなどには、その超毒ちようどく瓦斯ガスを防ぐ仕掛をちゃんと持つている。そういう防ぐ手段のあるものは全然駄目です。私は、全然防ぐ用意のない毒瓦斯が欲しいのです。博士、ぜひお力をお貸しねがいたい」

醬おもては、熱心を面おもてにあらわしていつた。

「ほうほう、だいぶん熱心じやが、それもあるにはある。しかしこれを教えるには、大分

高価こうかにつくが、いいかね。まずウイスキーならダース入いりの函単位はこたんいでないと取引が出来ないが……」

「ダース函でも何でも提供しますとも」

「ほい、お前にも似合わん、えらく気が大きいじやないかい」

「博士せんせい、わしの報復ほうふく成るかどうかという瀬戸際せとぎわなんです。あに真剣にならざるを得えないやです」

「そうか。なら、よろしい。ちよつとここに出してみようか」

「あ、待ってください。それはあぶない。ここで出されたんでは、私が死んでしまうじゃないですか。そればかりは遠慮えんよします」

「なにをうろたえとるか。出すといつても、本当の毒瓦斯を出すとはいっておらん。こういう毒瓦斯があるという話をしようかという意味でいったのじや」

「ああ、そうでしたか。やれやれ安心あんしんしました。とにかく博士せんせいと来たら、興きようが乗れば、敵と味方との区別くべつなんかもう滅茶苦茶めっちゃくちやで、科学の力を残ざん酷こくに発揮はつぱいせられますからなあ。

これまでに私は、博士のそのやり方で、ずいぶんにかい体験たいけんを経て来たもんです」

「醬よ、科学は残酷ざんこくなものじやよ。わしはそう思つとる。だから人間は出来るだけ早く科

学を征服しなければならぬのじゃ。ドイツに於ては——」

「博士、ドイツの話はもう沢山です。それで私のお願いは、ここに立っている腹心の部下で、新たに毒瓦斯発明官に任じました燻精を一週間だけお預けいたしますから、その期間にこの男に対し、新毒瓦斯研究の方針とか企画とか設備とか経費とか、ありとあらゆることを吹きこんでいただきたい。私は、この男の帰還を待つて、早速全世界覆滅の毒瓦斯を発明する鬼と化して、全力をあげ全財産を抛げうって発明官と一緒にやるつもりです」

鬻は、満天の星を吸いこもうとするのではないかと思われような大口をあいて、芝居気たつぷりに、途方もない重大決意を喚き散らしたのであった。

「ええ加減にしろ。大言よりは、ウイスキーじゃ。ペパミントじゃ」

金博士が、鬻に負けないような大きな声を出し、怒った蠅螂のような恰好で、拳固で天をつきあげた。

博士の例の地下研究所の一室において、白い実験衣じっけんいを着た金博士と発明官燻精くんせいとが向きあつていた。

二人は、手に手に盃さかずきを持つている。

実験台の上には、いろんな形をした洋酒の壘いが、所も狭く並んでいる。

博士は盃を唇のところへ持つて行き、黄色い液体を一口ぐつとのんで、後はしばらく唇と舌とをぴちやぴちやいませた。

「……ふーん、どうもおかしい。燻精、お前のんでみる」

「はい」

燻精が盃を唇のところへ持つていった。

「はい、のみました。実にこたえられない、いい酒ですなあ」

「そうかね。わたしには、それほどに感じないが……」

「博士せんせい、それは先生のお身体の工合ぐあいですよ。どこかどうかしていられるのです。糖分とうぶんが出ていますか、熱があるとかでしょう。私には、十分うまいですよ。やっぱリイギリス

製のウイスキーだけありますねえ。これは英帝国盛んなりし時代の生一本ですよ。間違いなしです」

「相当にうるさいね、君は」

「いや、酔払ったんです。これもこの酒の芳醇なる故です。そこで先生、酒の実験はこのくらいにして、お約束ですから、かねがねお願いしてありました毒瓦斯研究の指導を早速お始めいただきたいのですが……」

「ふん、毒瓦斯研究の件か」

博士は何となく不機嫌に、盃をがちゃんど台の上に置いて、

「では醬との契約に基き、正しく履行するであろう。神経瓦斯について講義をする」

「あ、その神経瓦斯というものなら、既にドイツ軍がエベンエマエル要塞戦に使ったということを聞いています。それはもう陳腐な毒瓦斯で……」

「ドイツ軍が使ったという話のある神経瓦斯は、一時性の神経麻痺瓦斯だ。それを嗅いだベルギー兵は、恍惚となつて、しばらく何も彼もわからなくなつた。もちろん、機関銃の引金を引くことも忘れて、とろんとおつた。気がついたときには、傍にドイツ兵がいたというのだ。これは一時性の神経瓦斯だ。一時性では効力がうすい。これに対し

てわしが考えたのは、持久性じきゆうせいの神経瓦斯だ。これをちよつと嗅ぐと、まず短くても一年間は麻痺している。人によつては三年も五年もつづく。そうなると、その患者はもはや常人として責任ある任務をまかせて置けなくなる。どうだ、すごいだろう」

博士は、ようやく機嫌をとりかえした。

「それは、生理学からいうと、どんな作用をするのですか」

「つまり、脳細胞を電気分解し、その歪みゆがみを持続させるのじやな」

「はあはあ、脳細胞を電解して歪みを持続させる……、それはおそろしいことだ。しかし電解させるといふのなら、それは怪力線かいりよくせんの一種ではありませんか。毒瓦斯とはいえないでしよう」

燻精師長は、さすがに醬の信任があついただけに、するどく博士に突込むつっこ。

「怪力線の如きものでは、ぴりぴりちかちかと来て、相手に知れるから、よろしくない。もつと緩慢かんまんなる麻痺性のものでないといけぬ。わしの作った神経瓦斯は、全然本人に自覚じかくがないような性質のものだ。臭気しゅうきはない、色もなくて透明だ、もちろん味もない、刺戟しげきもない。もちろん極く緩慢な麻痺作用を起すものだから、はじめから刺戟を殺してあるのだ。しかもその後いつまでたつても本人は、瓦斯中毒になつていてという自覚が起らな

いのだ。つまり常^{じょうにん}人と殆んど変りない精神状態におかれてあって、しかも脳の或る部分^{おちい}が日と共に完全麻痺に陥る。そうなると、たとえば、にこにこ笑って人と話をしていながら、手に握ったナイフで相手の心臓の真上^{まうえ}をぐざりと刺すといったようなことを、一向昂^{こうぶん}奮もせず周章^{あわ}でもせず、平気でやる。まあ、そういう最も常人らしい狂人に変質させるのが、わしのいう持久性神経瓦斯の効果じゃ。どうじゃな。君もそういう方向のものを考えてみてはどうか

「す、すばらしいですなあ」

燻精師長は、盃を置いて、金博士に抱きついた。

「よせやい、気持のわるい」

と、金博士は燻精を突き放し、

「さあ、もうそれだけのヒントを与えてやれば、お前は醬のところへ帰って、早速^{さつそく}発明研究を始めていいじやろう。さあさあ、とくとく醬の陣営へ戻れ」

「はい。では、引揚げましょう。永^{なが}々と御配慮^{ごはいりよ}ありがとうございました」

「いやなに、たった十分間の講義だけじゃ。しかしあのウイスキーにペパミント百四十函は、授業料としては至極^{しじく}やすいものじゃ」

「あれだけの夥おびただしい洋酒を捧ささげても、まだ先生の方が御損ごそんをなさいますか」

「それはそうじゃ。甚はなはだわしの方が損じゃ。帰ったら醬じょうに、そういつていたと伝えてくれ。しかし神聖なるバター・システムの誓ちかいの手前、こつちでもぬかりなく按配あんぱいしておいたと、あの醬じょうめにいつてくれ。さあ、引取るがよろしかろう」

「はいはい承知いたしました」

燻精には、何やら腑におちかねる点もあつたが、今が引揚ひきあげの潮時しおときだと思つたので、博士をいい加減かげんにあしらつた。着換えをすまずと彼は博士の前に出て恭々うやうやしく三拝九拝の礼を捧たげ、踵きびすをかえして、部屋を出いでんとすれば、何思つたか金博士は、急にうしろから呼び留とめた。

「ああ、お帰りはこちらだ。この狭い廊下をずつといつて、やがて突当ると、自動式の昇降機がある。それに乗つて一階へ出なさい。すると至極しごく交通に便なところへ出る」

と博士は、壁の釦ボタンを押し、壁に仕掛けてあつた秘密の潜り戸を開いて、指した。

「ああそれはどうも。こつちに通路があるとは、全く存知ぞんじませんでした」

「こつちは特別の客だけしか通さななんだ。暫しばらく誰も通さなかつたから、顔に蜘蛛くもの巣がかかるかもしれない。手で払いのけながら、そろそろ歩いていきたまえ」

「いや、御親切に、ありがとう」

「どういたしまして。はい、さようなら」

潜り戸を入った燻精師長のうしろで、ぱたんと扉ドアのしまる音がした。と同時に、博士が扉の向うで、さめざめと啜すすり泣くような声を聞いたと思つたが……。

4

南国の孤島において、醬しょう委員長は、あいかわらずの裸身はだかで、事務を執とっていた。例の太い附つけ髭ひげはもう見えない。

そこへ燻精が戻ってきた。

「おお帰つてきたか。して、金博士から、すばらしいネタを引き出したか」

「はい、持久性じきゆうせいの神経瓦斯しんけいガス……」

「叱しツ。これ、声が高い！」

醬は、手の舞い足の踏むところを知らずといった喜び方であった。彼は、燻精の手をとらんばかりにして、彼を砂地すなじの上に立つ古城こじょうへ連れていった。

「さあ、ここが毒瓦斯発明院だ。看板も、余が直よ々筆じきじきをふるって書いておいた」なるほど、あちこち崩くずれている城門に、毒瓦斯発明院の立て看板が懸かつていた。

「発明場は、すっかり用意をしておいたつもりじゃ。余みずか自ら案内をしよう」衛兵の敬礼をうけつつ、御兩人は城内に入った。

「敵空軍の目をのがれるため、外観は出来るだけ荒あれ果はてたままにしておいた。しかし、あの煙突だけは、仕方なく建てた」

太い煙突が古城の上にぬつと首をつきだしている。

「あれは何ですか、あの煙突は」

「試作しやくの毒瓦斯が空高く飛び去るためだ」

「毒瓦斯は元来空気より重きをよしとするのであります。煙突から飛び立つような軽い毒瓦斯てえのありません」

「いや、その重い毒瓦斯の逃げ路も作っておいた。向うに見える太い鉄管てつかんは、海面かいめんすれすれまで下りている。重い毒瓦斯は、あの方へ排気はいきするんだ。風下はベンガル湾わんだ。海う

亀みがめとインド鰐わにとが、ちかごろ身体の調子がへんだわいといだすかもしれんが……」

醬じょうが毒瓦斯どくわす発明院はつめいゐんに対して肩の入れ方は、非常なものだった。燻精しゆんせいは、彼の信頼しんらいに十分報むくいることが出来ようと自信しゆんたつぷりだった。

発明院長はつめいゐんちやうに燻精しゆんせいが就任しゆうにんして、百三十五名の発明官はつめいくわんが、その下に仕事を始めることになった。まず設備せつびを作るのに、三ヶ月かかった。それから燻精しゆんせいの講義かうぎが三ヶ月つづいた。

燻精しゆんせいの講義かうぎは全くすばらしかった。ときどき傍ぼう聴ちやうに来る醬買石じやうかいせきは、その都度つど、頤あじの先さきをつねって恐悦きやうえつした。

「ふふふ、洋酒百四十函やうしゆひやくしじゆが、こんなにすばらしい効目ききめがあらうとは、すこし気の毒にくだったなあ」

燻精しゆんせいの指導しゆどうぶりは、目のさめるようであった。

原動機げんどうきは廻転くわいてんし、ベルトはふるえ、軸シャフトは油あぶらをなめまわし、攪拌機かくはんきはかきまわし、加か熱ねつ炉ろは赤く焰もえ、湯気ゆげは白く噴ふき出し、えらい騒さわぎが毎日まいにちのように続ついた。

そうなるど、醬じょうは落ちついていられなくなつて、毎日まいにちのようにここに足を運はんだ。

「おい燻精しゆんせい。まだ例れいの神經瓦斯しんけいわすは出来ないか。出来たら、余あまに早く見みせてくれ」

「醬委員長じょうゐんちやうよ。今度こんどこそすばらしいものが出来でますぞ。瓦斯密度わすみつどが一・六〇〇〇四いち・ろく〇〇〇しです。

理想的な密度です。おどろいたでしょう」

「一・六〇〇〇四？ よくわからないねえ」

「精密なること、金博士の製品を凌駕りようがしています。かかる精密なる毒瓦斯は……」

「精密よりも、効目の方が大切だぞ」

「いや、この精密度なくして、あの忍耐力のつよい敵兵を斃たおすことは出来ん。あ、また靈感が湧わいた。おおそうか、この毒瓦斯に芳香ほうこうをつけるのだ。鰻うなぎのかば焼のような芳香をつけるのだ。無臭むしゅう瓦斯よりもこの方がいい。敵は鼻をくんくんならして、この瓦斯を余計よけいに吸い込むだろう。ああなんとというすばらしい着想点だろう！ 鰻ほかのかば焼の外ほかに焼き鳥の匂い、天ぷらの匂い、それからライスカレーの匂い等とうとう々々、およそ敵兵のすきな香かおりを、この毒瓦斯につけてやろう。なんと醬委員長、すばらしい発明ではないですか」

「なるほど、積極的吸入性のある毒瓦斯じゃな」

醬は、にやりと笑って、燻精院長の手をしつかと握った。

この新製毒瓦斯が、予定の数量だけ出来上ったのは、その年の夏だった。

醬は燻たいしゅうを帯たいしゅう同し、その毒瓦斯をもって、突とつじょう如戦線に現れた。

そして朝から時間割を決め、午前七時には鰻の匂いのする神経瓦斯を、午前九時には水す

蜜桃いみつとうの匂いのする神経瓦斯を、午前十一時には、ライスカレーの匂いのする神経瓦斯をと、用意周到な順序で次々に瓦斯弾ガスだんを、敵軍戦線へ向けて撃ち出したのであった。

その結果は、どうであつたか。

醬買石は、生命からがら、怒濤どとうのような敵の重圍じゅうういを切りぬけて、ビルマ・ルートへ逃げこむという騒ぎを演じた。

燻精の作つた新製の毒瓦斯は、悉く無力であつた。いや、うまそうな匂いをもって、反かえつて敵兵をふるい立たしめるという反効果はんこうかがあつたくらいであつた。燻精は、その戦場において捕虜となり、やがて病院に入れられた。

この顛末てんまつを聞いて、からからと笑つたのは余人よじんならぬ金博士であつた。

彼は唐箋とうせんをのべて、醬買石宛あてに手紙を書いた。

「謹呈きんてい。どうだ、持久性神経瓦斯の効目は。燻精は、わしのところから出ていくとき、特設の通路内で無味無臭無色無反応の持久性神経瓦斯を吸つて戻つたのだ。だから、そちらの陣営に帰りついたころから彼はそろそろ、脳細胞の或る個所が変になりはじめたはずだ。彼の発明製造した毒瓦斯なんか、どうして信用がおけようぞ。おい醬よ、これに懲こりて、今後を慎つつしめよ」

なるほど、そうだったか。肝腎かんじんの毒瓦斯発明院長の燻精が、金博士のところを辞去じきよするとき、瓦斯通路を歩かされ、すっかり瓦斯患者とされてしまったのを、当人はもちろん醬も気がつかなかつたのだ。

この手紙を受け取った醬は、たいへん口惜しがって、豆のような涙をぼろぼろ机の上におとしながら、博士に向つて抗議文を書いた。その要旨ようしは、

“金博士よ。バーター・システムの取引を承知しておきながら、かの燻精を変質させて送
りかえすとは、片手落ちかたておも甚はなだしい。われに確乎かつこたる決意あり。しつかり説明文をよこさ
れよ”

すると、金博士が折りかえし返事して曰く、

“醬よ。身から出た錆さびという諺ことわざを知らぬか。燻精を変質させて送りがえしたのは、お前が
わしに、表のレットテルとはちがう変質インチキ酒しゆを贈つてよこしたからだ。つまり変質に
対する変質の応酬おうしゆうである。わしは、バーター・システムの約を忠実に果たしたつもりで
ある。質クオリティ的ティヴのバーター・システムをね。あのインチキ・ウイスキーは悉く黄浦江こうほこう
流してしまつたよ。以後お前とは絶交ぜつこうじゃ”

と、博士は手紙の端はしに黒々と句読点くとうてんをうったのであつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1941（昭和16）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：まや

2005年5月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

毒瓦斯発明官

——金博士シリーズ・5——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>